

尼君は、(女の子の)髪をかきなでながら、「櫛ですくことを嫌がりなさるけれども、きれいな御髪ですこと。本当にたわいなくていらっしゃるのが、不憫で気がかりです。これくらい(の年齢)になれば、全くこんなふう(に幼稚)でない人もありますのに。亡くなった姫君は、十歳ほどで殿(Ⅱ父君)に先立たれなさった頃には、しっかりと物の道理をわきまえていらっしゃいましたよ。たった今にでも私が(あなたを)お見捨て申し(て死んでしまつ)たならば、どうやってこの世に生きておいでになろうとするのでしょうか。」と言って、ひどく泣くのをご覧になるにつけても、(光源氏は)わけもなく悲しい。(その女の子は)幼心にも、やはり(しんみりして)じっと(尼君を)見つめて、伏し目になつてうつむいた時に、(顔に)こぼれかかつてくる髪の毛が、つやつやとしてみごとに美しく見える。

これからどこで生い立っていくのかも分からない若草のようなこの子を後に残して消えていく露の身の私は、消えようにも消える空ありません。(死ぬにも死にきれませんよ。)

また(そこに)座っていた年配の女房が、「本当に(そうです)。」と泣いて、

若草の生い立っていく将来のことも分からないうちに、どうして露は消えようとするのでしょうか。(それまでは生きていらっしゃいませ。)

と申し上げているところに、(尼君の兄の)僧都が向こうから来て、「こちらは(外から)まる見えではございませんか。今日に限って端近においでですな。ここの上の聖の所に、源氏の中將が、瘡病のまじないにおいでになったことを、たった今聞きつけました。たいそうお忍びでいらっしゃったので、知りませんが、ここにおりながら、お見舞いにも参りませんでした。」とおっしゃると、(尼君は)「あら大変。本当に見苦しい様子を誰かが見てしまったかしら。」と言って、簾を下ろしてしまった。「世間で評判が高くていらっしゃる光源氏を、このような機会に拝見なさいませんか。俗世を捨ててしまった法師の心地にも、すっかりこの世の心配事を忘れ、(見ただけで)命が延びると思われるほどの(美しい)ご容姿なのです。さあ、ご挨拶を申し上げましょう。」と言って(僧都が座を)立つ音がするので、(光源氏は)お帰りになった。

何とも可憐な人を見たことだなあ、こうだから、この色好みの人たちは、ただもうこのような忍び歩きをして、めったに見つけられないような人をもうまく見つけるというわけなのだ、たまに出かけてさえ、このように思いもかけないことを目にするものだよと、おもしろくお思いになる。それにしても、実にかわいらしい子であったなあ、どういう人なのだろう、あのお方(Ⅱ藤壺の宮)のお身代わりとして、明け暮れの心の慰めにでも見たいものだ、と思う心が(光源氏の中に)深くとりついてしまった。